

各科目に於ける所感

○日本畫實習 平田〔松堂〕教授擔當

志望者六十人線描運筆の練習を平田教授自筆の手本に由つて指導し、次いで無木地硯箱を材料として、其表面に胡粉盛上法併に箔押を試みて日本畫の實際應用に利したる爲、非常なる好評を享け、日本畫も亦將來圖畫教育上重要な價值ある事を識らしむと同時に、其指導方法の暗示を與へたるものの如し。

○西洋畫實習 和田〔英作〕教授田邊〔至〕教授擔當

志望者百人

多數はモデルを使用する人體油畫を描き、他は木炭を以て石膏像を描出し、兩教授は熱心各自の畫の前に批評を試み、或は其短を指摘して形を正し、日本畫同様講習員は皆其懇切さに満足の意を表したり。

○エツチング實習 田邊〔至〕教授擔當

志望者五〇人

この講習は恐らく本邦に於ける最初の實習なりし丈、豫備知識なき者は他少の困難を伴ひたるも、稍理解ある者は極めて巧みに印刷を完了せり。

○圖案としての繪畫 伊東〔忠太〕工學博士講演

博士多年に渉る建築學上の蘊奥の一端を披歴せられ、尙其繪畫に造詣深き博士が圖畫教育論の新指針とも云ふべきものを明示せられ、一同熱心に傾聴せり。

○歐洲繪飾史 森田〔亀之助〕教授講演

歐洲の美術史を基調としたるもの故、美術史の教授に當る圖畫

教育者は興味を以て聴講せり。

○構成とは 水谷〔武彦〕助教講演

この講演は氏が獨逸留學中親しく一學生として、獨逸のバウハウスの教育組織とその主張する構成學とを學習したるより獲たる新研究にして、全員其興味を覺ゆること深く、教育上にも實際にも本講演は極めて効果ありしものゝ如し。

○文部省美術院展覽會

講習期間中の時間外又は休日にも全員とも屢々之を觀覽せり。

○見學

東京市芝浦東京工藝學校〔高等工芸學校〕及銀座伊東屋に開催中の圖畫手工教育展の見學をなす。

備考

聴講者は聴講證明書の下附を申出づるもの多かりしを以て、東京美術學校名義を以て證明書を下附することとせり。

⑫ 帝国美術院附属美術研究所

昭和三年九月に本校敷地内に建設の黒田記念館（350頁参照）が竣工し、美術研究所開設のために必要な備品、図書、写真等の研究資料が備えられ、館内に黒田清輝の遺作を展示する黒田子爵記念室が設けられた。翌四年五月、黒田清輝遺言執行人代表樺山愛輔は、この建物、設備、研究資料等に金十五万円を添えて帝国美術院に寄附。同五年六月二十七日勅令第一二五号を以てここに帝国美術院附属美術研究所（現東京国立文化財研究所）が設置され、同年同月、本校校長正木直彦が本研究所主事に、教授矢代幸雄が所員（主任）に、

講師田中喜作と助教青山新が同じく所員（経理部勤務）に任ぜられた。翌六年十一月、正木が帝国美術院長に就任すると同時に主事は矢代へと替った。

### ⑬ 美校回想——ドモ又の死——

山崎坤象

〔本篇は平成五年四月八日、山崎坤象氏（昭和五年西洋画科卒業、平成五年八月歿）宅において録音した談話と、氏が他界される寸前に執筆された回想記とに基づいて作成したものである。〕

私は明治四十年に彫刻家山崎朝雲の長男として駒込林町に生まれた。近所には東京美術学校の金沢庸治・長原孝太郎先生の家があり、よく行き来していたが、特に長原先生の息子の坦さんとは京北中学で同級だったので、仲良しだった。父のもとには大勢の弟子がいたが、父は私が彫刻家になるのは反対で、そのためもあって私は絵の方へ進むことにし、中学四年のとき本郷洋画研究所に入り、岡田三郎助先生の指導をうけて、大正十四年三月に美校に入学した。

当時の西洋画科では初めの二年間は長原先生・小林万吾先生の指導のもとに皆一様に学んで、三年目から岡田教室・藤島教室・和田教室のどれかを選ぶことになっていた。私は勿論岡田教室だった。各教室はそれぞれ先生の作風や性格を反映して特色があったが、生徒の人氣から言えば第一藤島教室、第二岡田教室、第三和田教室の順であった。岡田教室の同級生は小見辰男・小野佐世男・新来哲・松平四郎・三井滋雄・渡辺力および許達その他外国人留学生で、先

生はどの教室の場合も一応週二回見回って指導するきまりになっていた。

実技の外では先ず父と懇意だった大村西崖〔朝雲が高村光雲に入門する際、仲介の労をとった。——編者註〕先生の東洋美術史、矢代幸雄先生の西洋美術史、久米桂一郎先生の美術解剖、合田清先生のフランス語、そして教練があった。教練は中学時代のそれとはまさに雲泥の差で、実に楽なものだった。斎藤幸晴先生は生徒に優しくかったので人氣があったし、また、名前は思いつけないが配属将校も立派な人だったから、生徒に尊敬されていた。私らの後の時代になって急に厳しくなったと聞いている。

美校時代を振り返れば次々と思えば出は尽きないが、一番愉快な思い出と言えはクラス仲間「ドモ又の死」の劇をやったことだ。そもそも私の父は無類の映画好きで、よく私を連れて浅草のキネマクラブへ通ったので、私も幼い頃から自然と映画や演劇に親しむようになった。美校時代には仲間と本郷座の新劇をよく見に行った。一年ばかり小山内薫の万来舎に通ったりしているうちに滝沢修・千田是也・伊藤薫朔らとも親しくなった。父に内緒で蒲田通いを始めたのは昭和三年のことで、一度だけだが美術監督もやった。それは豊田監督の「いつわりの唇」制作のときで、要するに舞台装置の仕事をしたわけだが、アトリエ内の場面の装置を作るので美校の仲間頼んで教室から石膏像を借りることにした。夜、それを撮映所のトラックに載せてこっそり運び出したまではよかったが、その一つが壊れてしまい、とても困ってしまった。この仕事の月給は三十円で、初月給を母に見せると、こういうお金は直ぐ使ってしまうなぞ